

データで振り返る神戸高専図書館の30年

早稲田 一嘉*

Looking Back on 30 Years of Kobe City College of Technology Library with Data

Kazuyoshi WASEDA *

Keywords : collection of books and audio/visual, book review contest, research reports of Kobe City College of Technology

1. はじめに

神戸市立工業高等専門学校（以下神戸高専）は1990年（平成2年）の舞子台から研究学園都市へのキャンパス移転をして3年ほどたった1993年（平成5年）に創立30周年を迎えた⁽¹⁾。そこからさらに30年がたち2023年（令和5年）に創立60周年を迎えた。創立から後半の30年を振り返ると、情報技術の劇的な変化が起こっている。1993年はWebブラウザの先祖とも言えるMosaicが公開（HTMLのバージョン1.0も公開）され、情報化社会が産声をあげた年ともいえる⁽²⁾。

神戸高専図書館の過去30年のデータは40周年誌⁽³⁾、50周年誌⁽⁴⁾、60周年誌（発行予定）⁽⁵⁾に記載されているが、そのデータをグラフ化し1993年からの神戸高専図書館の30年を振り返ってみることで、情報化された社会と図書館の状況が見えてくるのではないかと思われる本稿の執筆に至った。グラフは世の中の情勢や神戸高専の出来事と合わせて説明をしているが、立証することを目的としていないため、あくまでも時代背景との関連の推察に留めていることをご承知おき願いたい。

2. 蔵書数

蔵書数については、総記、哲学、歴史、社会科学、自然科学、工学、産業、芸術、語学の分野に分けられて記録がされてきた。全蔵書数の推移（図1）各分野別蔵書数の推移（図2）および1993年を起点とした各分野別蔵書増加率（図3）を示す。

2.1 全蔵書数の推移 図1より、基本的には、全体として蔵書数はなだらかに増加傾向であるが2004～2019年度は変化が少なく、新規購入や寄付による増加と除籍のバランスがとれていたと考えられる。図2より、最も蔵書数が多いのは工学分野であるがあまり増加しておらず、語学の顕著な増加と総記が増加傾向にあることで全体の蔵書数増に繋がっていると思われる。

2.2 各分野蔵書冊数の推移 各分野の中で特徴的な傾向を紹介する。図2より、工学分野については、2004年をピークに蔵書数が2015年まで減少し、その後2022年までわずかに増加傾向にある。蔵書総数は増加し続けていたため、その中で最も多い工学分野が増加に寄与していると考えていたが、実際は2004年から2015年までは減少傾向であった。これは、移り変わりの激

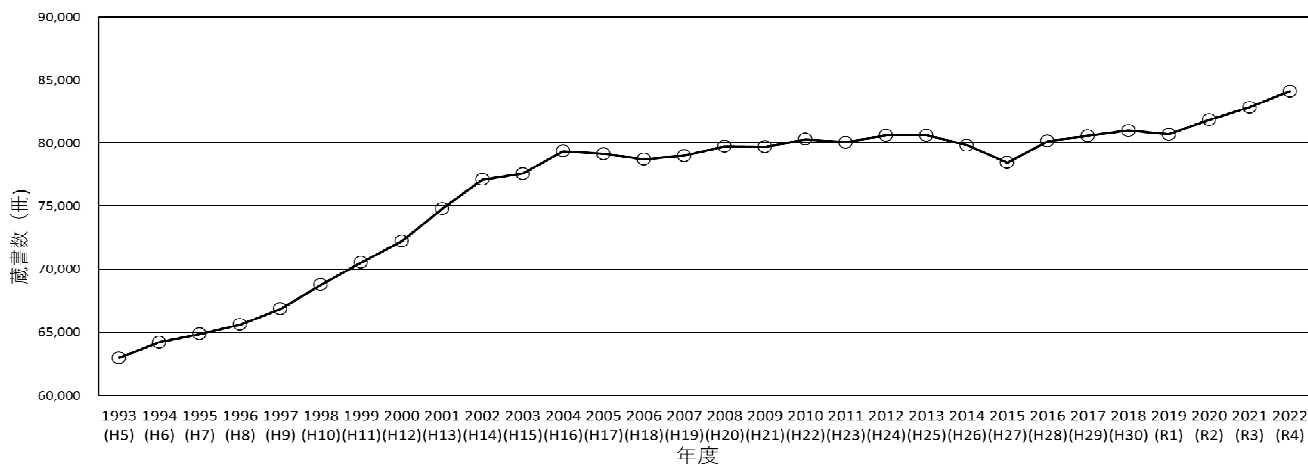


図1 神戸高専図書館の全蔵書数の推移。

* 機械工学科 教授

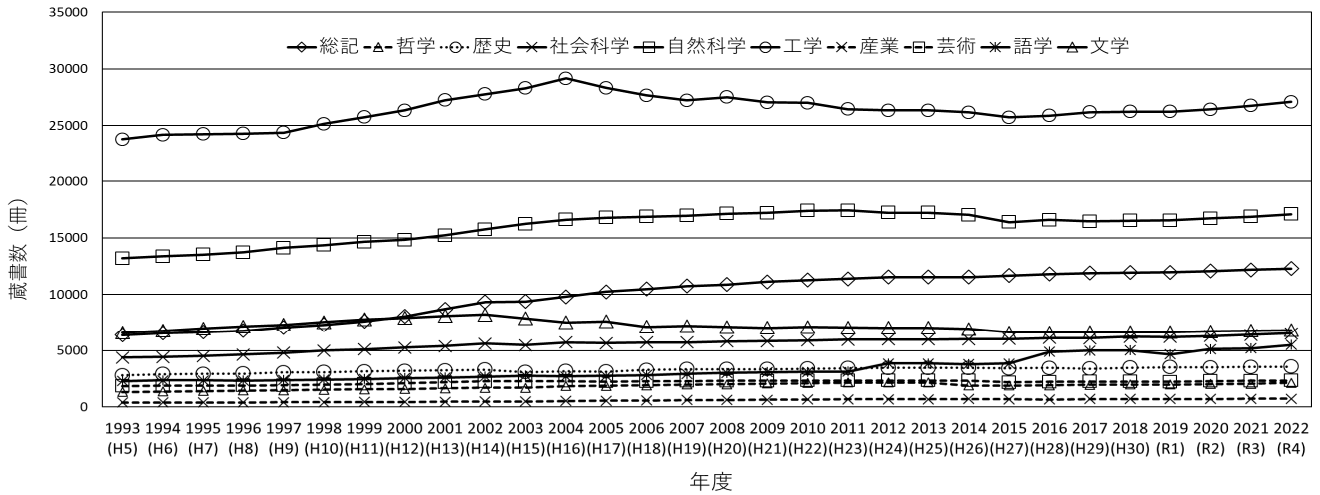


図2 神戸高専図書館各分野別蔵書数の推移.

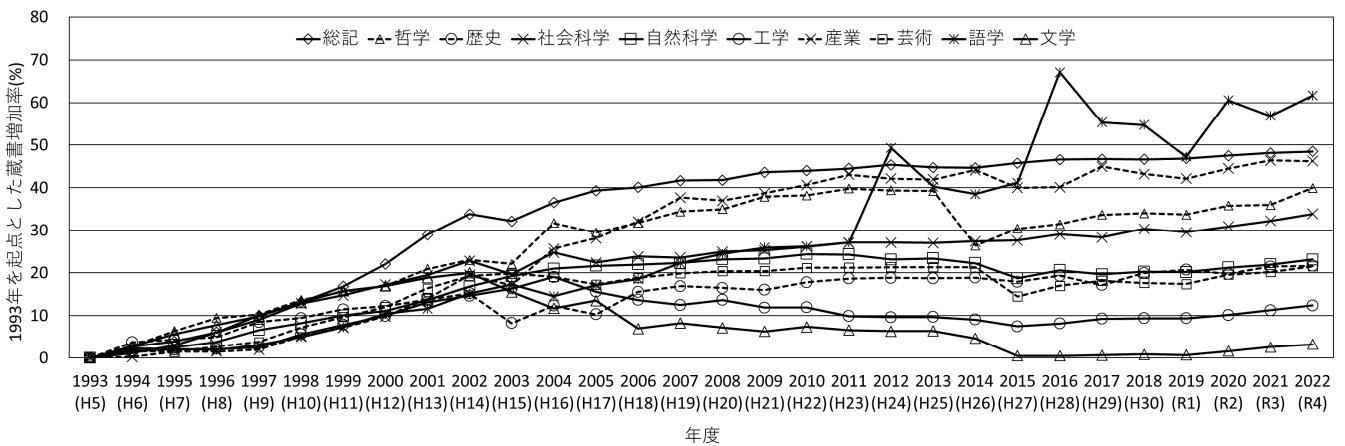


図3 神戸高専図書館の1993年を起点とした各分野別蔵書増加率の推移.

しい工学分野は書籍よりもインターネット上での発信が増えたことが一因として挙げられる。特に情報分野の場合は技術の陳腐化が激しく、書籍という半永久的な形で残すというよりも、今必要な情報の記録媒体として書籍よりもすぐに更新が可能なWeb上での情報公開の方が扱いやすいと推察される。また、ソフトウェア開発(プログラムの情報共有)にてホスティングサービスが普及しているが、例えば、GitHub⁽⁶⁾、Bitbucket⁽⁷⁾(開始年2008年)などに情報公開の手法が移りつつあることが影響していることも一因として挙げられる。

図3より、1993年を起点とした蔵書の増加率をみると、2011年から語学分野が最も顕著に増加していることがわかる。神戸高専での語学に関する出来事を列挙すると、

- ・2008年: TOEIC 専攻科 H21 年度入試採用
 - ・2012年: 専攻科 H25 年度入試の英語試験廃止し TOEIC などの外部試験採用, TOEIC Bridge 3 年生対象に実施
 - ・2014年: Pileggi, Mark Andrew 先生赴任, 今村一博先生が英語多読に関する実践を実施
- などがあり、これらの影響ではないかと考えられる。

3. 図書館利用者数の推移

図4~7に学生, 教職員, 一般そして合計の貸出者数および貸出冊数の推移を示す。

3.1 学生の利用について 図4より, 学生の利用は2004年をピークに減少傾向である。ブックハンティングなどを実施しているものの, 図書の貸出者数は増加していない。インターネットの発達やスマートフォン所持率の増加の影響は否定できない⁽⁸⁾。2020年~2022年までは大きな貸出数減となっているが, これは, 新型コロナウイルス (COVID-19) による影響と思われる。
参考: ・2002年から2005年頃まで: 「第一次ケータイ小説ブーム」・2006年以降: 「第二次ケータイ小説ブーム」・2011年頃: 高性能携帯電話スマートフォンの普及に伴ってスマホ小説が浸透⁽⁹⁾

3.2 教職員の利用について 図5より教職員貸出冊数については1996年が極端な減少を示している。これは, 1995年の阪神淡路大震災後の対応で多忙だったことが考えられる。また2010年から徐々に貸出数が減っているのは, 専門書の電子化によるものと思われる。

3.3 一般の利用について 図6より一般の貸出につい

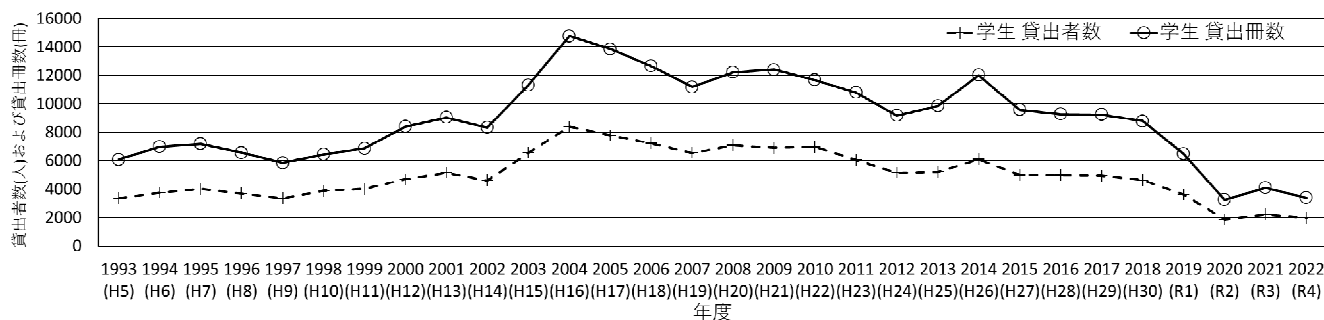


図4 学生の貸出者数および貸出冊数の推移。

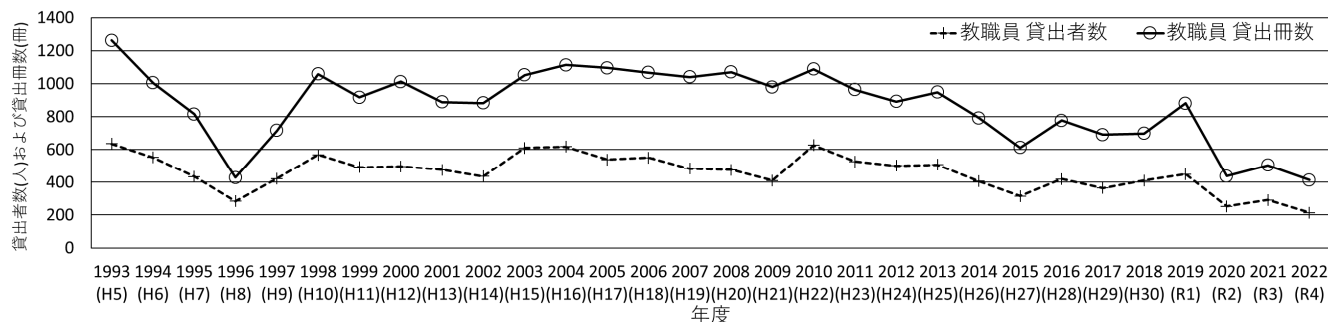


図5 教職員の貸出者数および貸出冊数の推移。

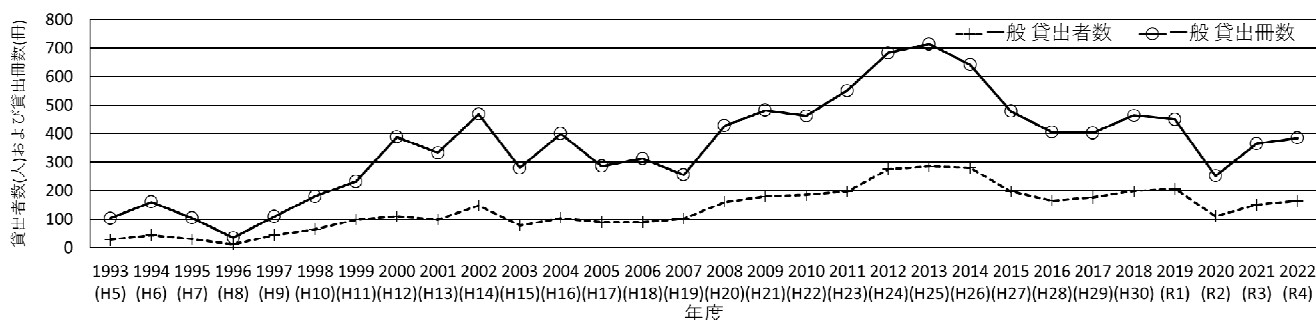


図6 一般の貸出者数および貸出冊数の推移。

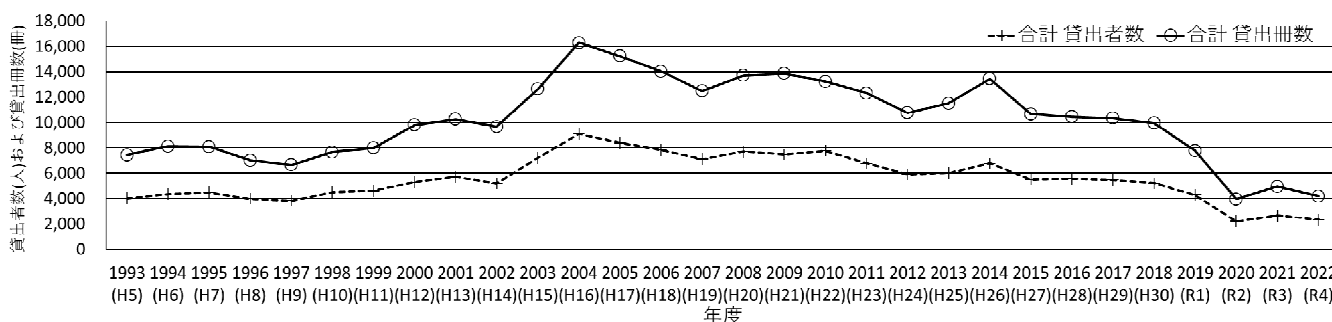


図7 合計の貸出者数および貸出冊数の推移。

ては唯一微増となっている。団塊の世代の退職が2012年前後なので、2013年がピークになっていると考えられる。

3.4 全体の利用について 学生利用が圧倒的に多いため全体としては2004年度から減少傾向となった(図7)。

4. AV資料所蔵数およびAV利用数

4.1 AV資料所蔵数 図8にカセットテープ、CD、ビ

デオテープ、DVD、Blu-rayの所蔵数の推移を示す。図8より、カセットテープは30年間変わらず85本、CDは2006年から変わらず757枚、ビデオテープは2011年から変わらず431本、DVDは2003年から所蔵を始め2022年まで顕著に増加し385枚、Blu-rayは2012年から所蔵を始め2022年まで顕著に増加し341枚となった。なお、DVDに関してはBlu-rayを購入時にセットでDVDが付属するものもあるためBlu-ray購入以降後

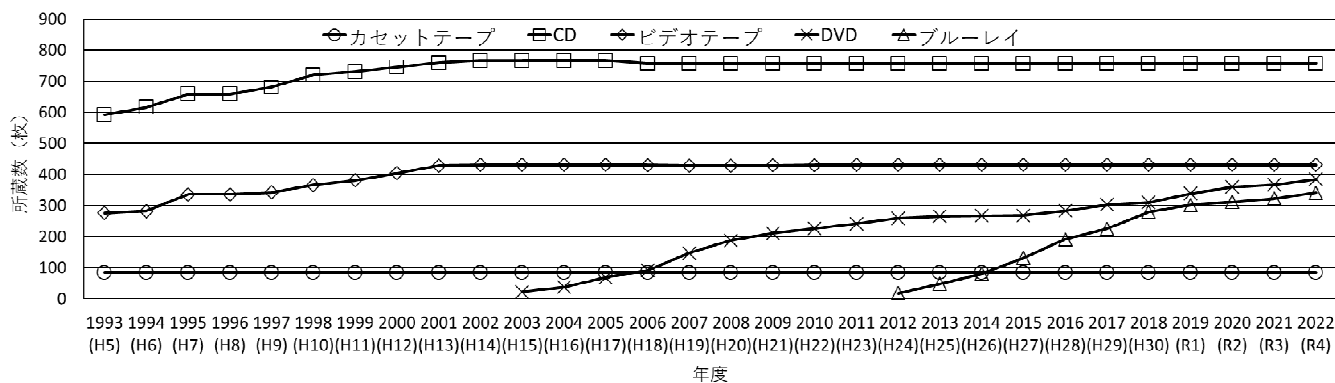


図8 カセットテープ, CD, ビデオテープ, DVD, Blu-ray の所蔵数の推移。

も増加している一因となっている。

4.2 CD・カセット利用数 図9にCD・カセットの利用人数および利用本数の推移を示す。図9より、1995年極端な利用数減は阪神淡路大震災の影響と思われる。また、2007年度を境に利用者がほとんどいなくなっていることが分かる。これは、2005年ごろからの音楽のダウンロード販売が開始⁽¹⁰⁾され、音楽をCDで聴くよりもダウンロードして音楽プレーヤーなどで聴くことが増えた時代背景が影響していると思われる。

参考：・1999年：USBへの対応を強化した「Microsoft Windows 98 Second Edition」が発売→携帯型MP3プレーヤー"Rio500"が発売⁽¹¹⁾

- ・2001年：iPodがApple Computerから発売⁽¹²⁾
- ・2004年：iPodが完全にMac/Windows両対応となる⁽¹²⁾
- ・2005年：iTunes Music Store日本でサービス開始⁽¹⁰⁾

・2010年：Amazon MP3ストア（後のAmazon Music）日本での音楽配信サービス開始⁽¹³⁾

4.3 映像作品利用数 図10にビデオテープ、DVD、Blu-rayの利用数の推移を示す。図10より2003年のDVD取り扱いを機にビデオテープの利用が激減し、2013年のBlu-ray取り扱いを機にDVDの利用が激減したことが分かる。全体的に利用者は年を追うごとに減少傾向となっており、近年は動画配信サービスが普及してきていることからさらに利用数は減っていくと思われる。2020年～2022年はコロナ禍で図書館の利用が減少したことで極端に減ったことが分かる。

参考：

- ・2007年：YouTubeが日本語対応⁽¹⁴⁾
- ・2008年：YouTube一般の認知度が急速にあがる⁽¹⁴⁾
- ・2010年：AppleのApp StoreにInstagram登場⁽¹⁵⁾

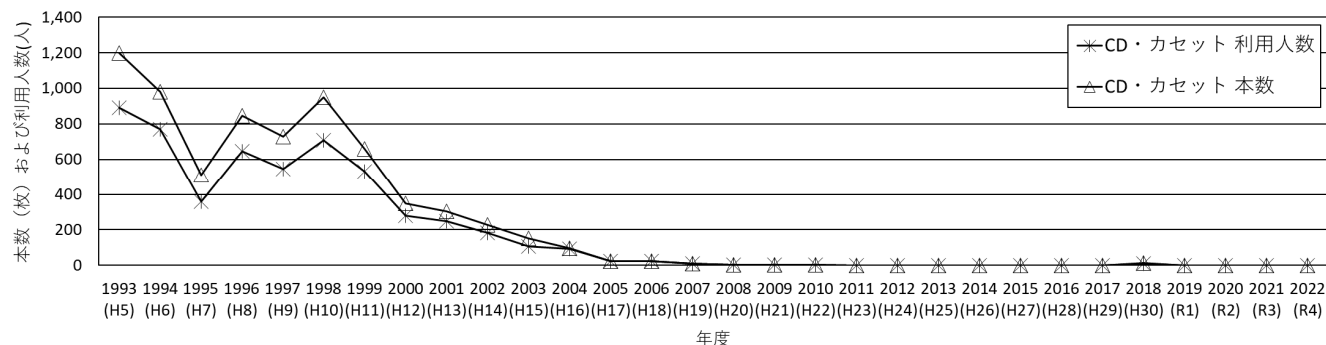


図9 CD・カセットの利用人数および利用本数の推移。

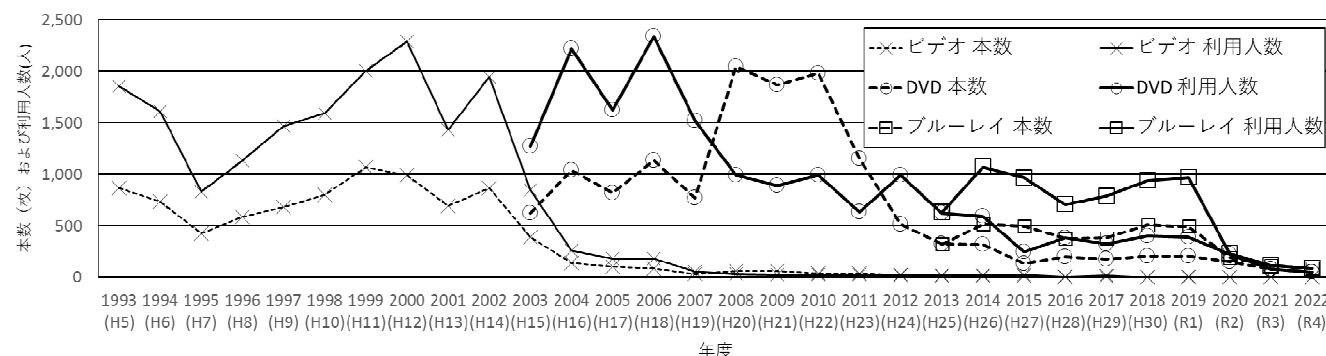


図10 ビデオテープ, DVD, Blu-ray の利用数の推移。

- ・2015年：Netflix⁽¹⁶⁾、Amazon Prime 日本で動画配信サービス開始⁽¹⁷⁾
- ・2019年：Apple TV 日本で動画配信サービス開始⁽¹⁸⁾

5. 読書感想文コンクールの推移

図 11 に読書感想文コンクール課題図書タイトル数および応募数の推移を示す。課題図書タイトル数は 10 ないし 11 を挙げてきたが 2022 年に 7 タイトルとなった。図 11 から分かるが、応募数は基本的に減少傾向にある。1996 年は応募者数が極端に多いが、国語科にて夏季休業の課題あるいは阪神淡路大震災時の混乱期に国語の単位を落とした学生の再評価課題として読書感想文コンクールを設定したのではないかとと思われる。2022 年には生成系 AI の急速な発展に伴い、有名な小説などに関しては、AI が読書感想文を作成可能な時代となる一方で、神戸市内の小中学校で夏季休業中の読書感想文課題は任意提出となり、今後の読書感想文コンクールのあり方について一考の余地がありそうである。

6. 研究紀要の推移

図 12 に神戸高専研究紀要論文および資料掲載数推移を示す。また、図 13 に、学科別の論文と資料合算数の掲載数推移を示す。なお、複数の学科をまたいでいる場合は筆頭著者の所属学科にて集計した。図 12 から 1997 年に大幅に増加していることがわかる。これは、

1995 年の阪神淡路大震災の影響と思われる。震災後の混乱期には論文数が減り、図 13 から分かるように 1997 年の都市工学科の論文数が増加しており、震災によって貴重な災害に関連するデータが取れたことがその要因のひとつと思われる。

図 13 より 1999 年は機械工学科と都市工学科の掲載数が少ないが、2000 年度の機械システム工学専攻、都市工学専攻の設置のための業務増が影響していると思われる。図 12 より 2006 年～2009 年に論文掲載数が増加している。これは、学内の昇任昇格基準が明確に示された時期(2006 年)に重なる。2011 年より掲載数が漸減しているが、外部評価や専攻科レビュー審査や専攻科の特例適用などにおいて、外部の学術誌への査読付き論文の投稿が増えていることが原因と考えられる。

日本の論文数について、国立大学が法人化された翌年の 2005 年から増加が鈍化して 2007 年から減少に転じたことがあった。教育機関の運営の大きな変革期においては、研究以外の業務が増え、研究時間が削られることは大いに関係しているのではないかとと思われる。神戸高専の法人化後の 2023 年以降も研究紀要投稿数の減少も十分に予測される。

7. まとめ

急速にデジタル化が進んだ 30 年であったためか、紙媒体による情報の保管を主とする図書館の利用数は 2004 年度以降は下降しているように見える。情報技術

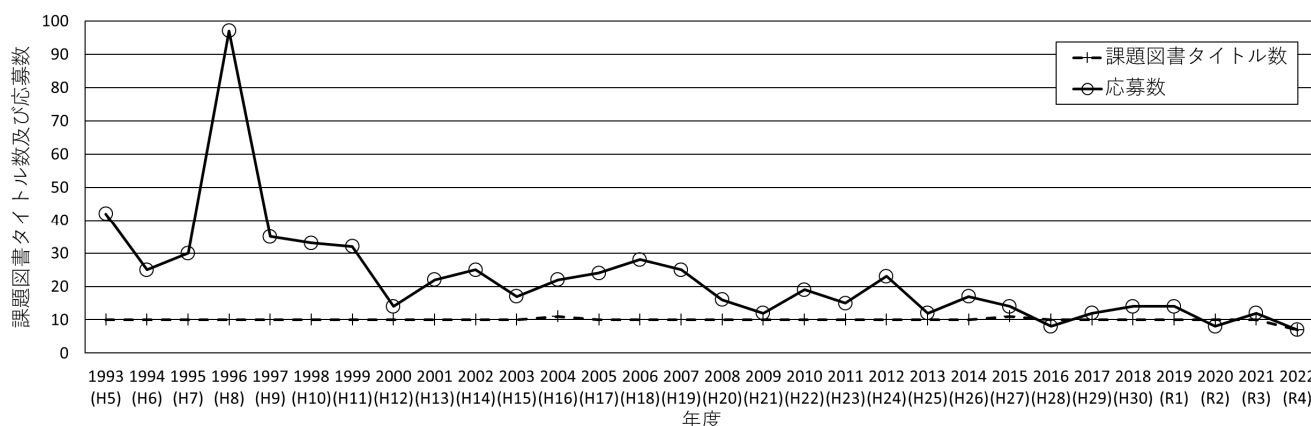


図 11 読書感想文コンクール課題図書タイトル数および応募数の推移。

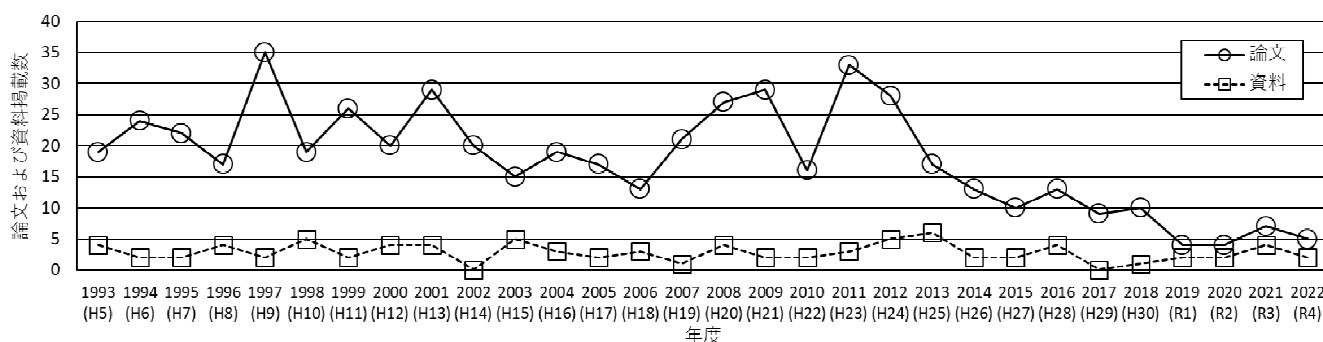


図 12 神戸高専研究紀要論文および資料掲載数推移。

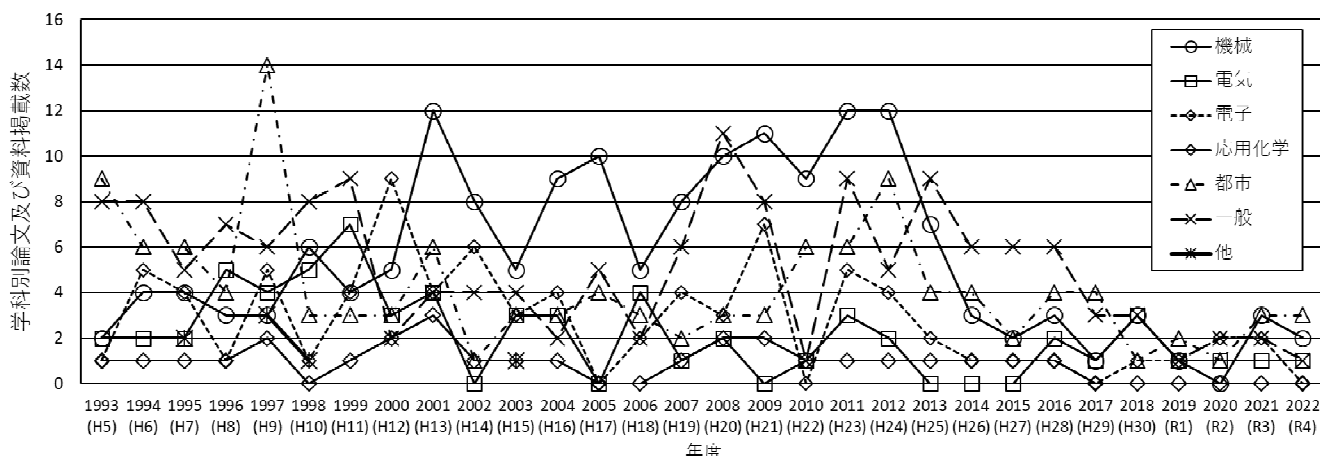


図 13 神戸高専研究紀要学科別の論文と資料合算数の掲載数推移。

における電子データ保存もオンプレミス（自前サーバー）からクラウドサービス（外部サーバー）に移行しており、情報のアーカイブ（保管庫）としての役割は少し変化が必要かもしれない。高校生年代が本を読まなくなっているという情報⁽⁹⁾があるが、その代わりにインターネット上などで文章を読む機会が増え高校生の読書時間は減少していないというデータもある。仮に読書時間が減少していなくてもインターネットの性質上利用者の嗜好に合わせた情報ばかりが集積するため、興味のある分野にしか接点がなくなってしまう。学生利用者が減り続けている時代に学生自身が気づかない情報に触れさせるきっかけを発信する重要な役割が神戸高専図書館にはあると考える。

謝辞

本資料の執筆に当たり、英語科の上垣先生に情報提供をいただきました。ここに謝意を表します。

参考文献

- (1) 神戸高専：神戸高専沿革，<http://www.kobe-kosen.ac.jp/introduction/history.html>，2023 閲覧。
- (2) 吉森ゆき ITmedia エンタープライズ：「Mosaic から Chrome まで—Web ブラウザ戦争の来し方行く末」，https://www.itmedia.co.jp/enterprise/articles/0809/06/new_s004.html，2008。
- (3) 神戸高専：「40 周年記念誌」，2004。
- (4) 神戸高専：「50 周年記念誌」，2014。
- (5) 神戸高専：「60 周年記念誌」，2024。
- (6) GitHub：ウィキペディア(Wikipedia)，<https://ja.wikipedia.org/wiki/GitHub>，2023。
- (7) Bitbucket：ウィキペディア(Wikipedia)，<https://ja.wikipedia.org/wiki/Bitbucket>，2023。
- (8) 毛利康秀：「The Society of Socio-Informatics 高校生世代における携帯電話・スマートフォンの利用に関する調査分析—普及時期別ならびに地域別の推移・

比較—」，pp.107-112，NII-Electronic Library Service，2023。

- (9) ケータイ小説：ウィキペディア(Wikipedia)，<https://ja.wikipedia.org/wiki/ケータイ小説>，2023。
- (10) iTunes Store：ウィキペディア(Wikipedia)，https://ja.wikipedia.org/wiki/iTunes_Store，2023。
- (11) PC Watch：「ダイヤモンド，USB 対応携帯型 MP3 プレーヤー「Rio 500」」，<https://pc.watch.impress.co.jp/docs/article/990721/diamond.htm>，1999。
- (12) iPod：ウィキペディア(Wikipedia)，<https://ja.wikipedia.org/wiki/iPod>，2023。
- (13) Amazon Music：ウィキペディア(Wikipedia)，https://ja.wikipedia.org/wiki/Amazon_Music，2023。
- (14) オノフ：日本で YouTube は、いつから流行ったのか？YouTube の自主調査レポートまとめ，<https://www.onoff.ne.jp/blog/?p=151>，2023。
- (15) Instagram：ウィキペディア(Wikipedia)，<https://ja.wikipedia.org/wiki/Instagram>，2023。
- (16) Netflix：ウィキペディア(Wikipedia)，<https://ja.wikipedia.org/wiki/Netflix>，2023。
- (17) Amazon Prime Video：ウィキペディア(Wikipedia)，https://ja.wikipedia.org/wiki/Amazon_Prime_Video，2023。
- (18) Apple TV：ウィキペディア(Wikipedia)，https://ja.wikipedia.org/wiki/Apple_TV，2023。
- (19) 速読情報館：「50%の高校生が本を読まない3つの理由」，<https://www.sokunousokudoku.net/media/?p=1881>，2019。